方向

第一四〇号　一九九二年一月一日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

薬草喩品

―法華経巡礼 69―

1991.12.11 原田憲雄

この品（章）の梵文題名は、Ogadhi-parivarto nama pañcamah である。ogadhi は、女性名詞で、草、薬草、本草、一年生草本などと訳される。正本（正法華経）が「薬草品第五」とするのは文字通りの訳であり、妙本（妙法蓮華経）が「薬草喩品第五」とするのは、内容によって「喩」字を補ったのであろう。正本、妙本、ともに巻数は第三である。この品で注目すべきは、正本の後半に当たる部分が妙本には欠け、添品（添品法華経）に存することである。これについては、後に述べたい。

05-01. さて、世尊は、長老マハーカーシャパや、その他の年老いた偉大な声聞たちに話しかけられた――

そうだ、そうだ、マハーカーシャパよ、あなたがたのためには本当にいいことだ、あなたがたが如来の真実の功徳を語るのは。これらは　カーシャパよ、如来の真実の功徳だが、ほかにも無量無数の功徳があり、その究竟に達することは容易ではない、無量カルパのあいだ語り続けたとしても。如来は、カーシャパよ、法の主・一切の法の王・主宰者・自在者なのだ。カーシャパよ、如来が、いかなる法を、いかなるところに設置しようと、それはそのとおりに存在する。一切の法を、如来は適切に指示し、如来の知をもって、それらの法が一切知者の地位に進むように設置する。また如来は、一切の法の意味につき自在を得ており、

意味の帰着するところを見、一切の法を向上させようとする意向をもち、一切の法を巧みに決定する知は最高究竟に達しており、一切知者の知を教示し、一切知者の知を設置する。カーシャパよ、これが尊敬されるべく正しく覚った如来なのだ。

atha khalu bhagavān āyuṣmantaṃ mahākāśyapaṃ tāṃś cānyān sthavirān mahā-śrāvakān amantrayāmāsa/ sādhu sādhu mahākāśyapa sādhu khalu punar yuṣmākaṃ kāśyapa yad yūyaṃ tathāgatasya bhūtān guṇa-varṇān bhāṣadhve / ete ca kāśyapa tathāgatasya bhūtā guṇā ataś cānye 'prameyā asaṃkhyeyā yeṣāṃ na sukaraḥ paryanto 'dhigantum aparimitān api kalpān bhāṣamāṇair/ dharma-svāmī kāśyapa tathāgaḥ sarva-dharmāṇāṃ rājā prabhūr vaśī / yaṃ ca kāśyapa tathāgato dharmaṃ yatropaniksipati sa tath-āiva bhavati / sarva-dharmāṃś ca kāśyapa tathāgato yuktyopadiśatyupaniksipati (W:yuktyopaniksi-pati) / tathāgata-jñānenopaniksipati (W:/ tathopaniksipati) yathā te dharmāḥ sarvajña-bhūmim eva gacchanti / sarva-dharmārtha-gatiṃ ca tathāgato vyavalokayati / sarva-dharmārtha-vaśitā-prāptaḥ sarva-dharmādhyāśaya-prāptaḥ sarva-dharma-viniścaya-kauśalya-jñāna-paramā-pāramitā-prāptaḥ (W:/) sarvajña-jñāna-samdarśakaḥ sarvajña-jñānāvatārakaḥ sarvajña-jñānopaniksepakaḥ kā-yapa tathāgato 'nan samyak-sambuddhaḥ //

05-02. たとえば、カーシャパよ、この三千大千世界には、さまざまのすがた、さまざまの種類のあらゆる植物、潅木や薬草や喬木があり、さまざまの名前の薬草の群落があり、地上に、山岳に、渓谷に生えている。ま

た、多くの水気を充満した雲が湧きあがり、湧きあがって三千大千世界を覆い、覆ってあらゆるところで同時に雨を降らせるとしよう。そこでカーシャパよ、三千大千世界の繊細な茎・枝・葉・花の植物、灌木や薬草や喬木があり、大樹巨木の植物、灌木や、薬草や、喬木があり、それらすべては、大きな雲が降らせた雨から、力に応じ、場所に応じ、水気を吸収する。それらは、同じ味の、同じ雲から降った多くの雨によって、種子に応じて実を結び、成長し、広大になり、かくて花を咲かせ、実をつけ、またそれぞれに違った名で呼ばれる。同じ大地に立つすべての薬草の群落や、種子の群落は、同じ味の水で潤される。同様に、カーシャパよ、如来・尊敬されるべき・正しく覚った人は、この世界に現われる。大きな雲が湧きあがるように、如来もまた現われて、天・人・アスラと共なるすべての世界に宣告する。たとえば、カーシャパよ、大きな雲が三千大千世界の一切を覆うように、同様に、カーシャパよ、如来・尊敬されるべき・正しく覚った人は、天・人・アスラと共なる世界の前で、このような声を放って、その大音声を聞かせる。

tadyathā 'pi nāma kāśyapāsyāṃ trisāhasra-mahā-sāhasrāyāṃ loka-dhātau yāvantas tṛṇa-gulmauṣadhi-vanaspatayo nānā-varṇā nānā-prakārā oṣadhi-grāmā nānā-nāmadheyāḥ pṛthivyāṃ jātāḥ parvata-giri-kandareṣu vā (W:/) meghaś ca mahā-vāri-paripūrṇa unnemed unnamitvā sarvavatīṃ trisāhasra-mahā-sāhasrāṃ loka-dhātuṃ saṃchādayet saṃchādya ca sarvatra sama-kālaṃ vāri pramuñcet / tatra kāśyapa ye tṛṇa-gulmauṣadhi-vanaspatayo 'syāṃ trisāhasra-mahā-sāhasra-loka-dhātau tatra ye taruṇāḥ komala-nāḍa-śākhā-patra-palāśās tṛṇa-gulmauṣadhi-vanaspatayo drumā mahā-drumāḥ sarve te tato

mahā-megha-pramuktād vāriṇo yathā-balaṃ yathā-viṣayam ab-dhātuṃ pratyāpibanti te caika-reseṇa (W:rasena) vāriṇā prabhūtenaika-megha-pramuktena yathā-bījam anvayaṃ vivṛddhiṃ (W:vivṛddhaṃ) vi-rūḍhim vipulatāṃ āpadyante tathā ca puṣpa-phalāni prasavanti te ca pṛthak-pṛthag nānā-nāma-dheyāni pratilabhante / eka-dharaṇī-pratiṣṭhitāś ca te sarva oṣadhi-grāmā bīja grāmā (W:) eka-rasa-toyābhiṣyanditāḥ / evam eva kāśyapa tathāgato 'ham samyak-sambuddho loka utpadyante/ yathā mahā-megha unnamate tathā tathāgato 'py utpadya sarvavantaṃ sa-deva-mānuṣāsuraṃ lokaṃ sv-areṇābhi-vijñāpayati / tad-yathī 'pi nāma kāśyapa mahā-meghaḥ sarvāvatīṃ trisāhasra-mahā-sāha-sraṃ loka-dhātum avacchādayati / evam eva kāśyapa tathāgato 'ham samyak-sambuddhaḥ sa-deva-mānuṣāsurasya lokasya purata evaṃ śabdam udīrayati ghoṣam anuśrāvayati /

『リトル・トリー』（一九九一年・めるくまーる社）1991 12 15 原田憲雄

フォレスト・カーター著　和田穹男 訳

父が死んでから一年後に、母とも死に別れた、インディアンの五歳の男の子を、どこへ引き取るか、という相談の場から話が始まる。

だれが引き離そうとしても泣き声ひとつあげず、ただただ祖父の脚にしがみついていた「ぼく」の頭に、祖父の大きな手がゆっくり降りてきて、「ぼく」は祖父母の山の家で育てられることになる。バスに乗り、バスから

降り、長い道を歩き、すっかり夜になった道をへとへとになって山にわけ入ると、

歩くにつれて山がぼくたちを迎え入れ、四方から包みこんでくるように思われた。……あらゆるものが息を吹きかえしたのか、木々の間からささやき声やため息がやわらかく濕れてくる。もう寒くはなかった。……

「ぼく」は祖父母から「リトル・トリー」と呼ばれる。祖父は半分、祖母は完全なチェロキー族で、母なる大地とチェロキー族のおきてに従って生きている。その生き方を見、太陽や月、風や雲、山や川、動物や植物とともに過ごすうちにリトル・トリーもまたチェロキー・インディアン――人間の身勝手さから自然を破壊して恥じない「文明人」とはちがった人達――の生き方を自得してゆく。

「政治家」の干渉によって祖父母から引き離され、孤児院に入れられ、苦しむ時期もあったが、祖父や祖父の友人達のめだたない努力によって、山の生活にかえる。だが、それから二年のちに祖父が死に、犬たちが死に、つづいて祖母も死ぬ。

祖母は、祖父の気に入りだったオレンジ色、緑、金色の柄模様のドレスに身を包んでいた。活字体で書かれたメモが胸にピンでとめてあった。それにはこう書いてあった。

リトル・トリー、わたしは行かなくてはならないの。風の音を聞いたら、木々を感じるように、わたしたちを感じてちょうだい。おまえが来る日をわたしたちは待っています。次に生まれるときには、もっとよくなるでしょう。なにも心配ないわ。おばあちゃんより。

祖母を葬ったリトル・トリーは、次の春、残った犬の二匹と山を降りて仕事を捜す旅に出る。

農場を見つけては、働かせてくれるよう頼んだ。しかし、犬を置くわけにはいかないという返事のときは、ぼくはただちにそこを立ち去った。人は犬に助けられている恩を忘れてはならない、と祖父はいっていた。犬の一匹は、氷を踏み破って川に落ち、死んだ。いま一匹のブルー・ボーイと「ぼく」は農場で働きながら西へ西へと向かっていた。ある午後おそく、ブルー・ボーイがぼくの馬のそばに来て、そのままへたりこんだ。彼にはもう一歩も歩けなかった。鞍の上にブルー・ボーイを抱き上げた。ぼくはシマロンの真赤な夕日に背を向け、東の方角へ引きかえした。ある日の明け方、ぼくらはようやく山のふもとにたどりついた。頂上に彼を運び上げたとき、朝日が東の地平に顔をのぞかせた。

ぼくが墓穴を掘るのを、ブルー・ボーイは横になったままじっと見つめている。穴を掘り終わると、かれを膝の上に抱いた。抱かれながら、彼はときどきぼくの手をなめた。

兄弟のように親しい犬の最後をえがいたところで、この小説は終る。

チェロキー・インディアンの作家フォレスト・ペッドフォード・カーターの自伝的回想録『リトル・トリー』『The Education of Little Tree』は、一九七六年に出版された。かれの作家生活は、四八歳から五三歳で急死するまでの五年間で、『テキサスへ』（一九七六年）『ジョジィ・ウエイルズの復讐の旅』（同）につづく第三作。最後は『山上のわれを待て』（一九七八年）。『テキサスへ』は、クリント・イーストウッドの監督・主演で映画化され、日本では「アウトロー」というタイトルで公開されたそうである。わたしは教員をやめてからの三年間ほどはテレビで見うる映画を片っ端から見た。なかでもイーストウッドのものは気に入って、洩らさなかった

つもりだが、「アウトロー」は見なかったのか、見て忘れたのか、覚えていない。『リトル・トリー』を読んで感動し、訳者の「あとがき」でそのことを知り、たいへん残念だが、こんどぶつかったときに見る楽しみは残っているわけだ。映画化されたものなら、翻訳は出ているはずと、図書館で出版目録のたぐいを繰ってみたが、どうやらフォレスト・カーターのもので翻訳されたのは『リトル・トリー』が最初らしい。

この本は、アメリカでは、最初、青少年問題や教育、あるいは、人種・地球・環境問題などに関心をもつ人達の間に熱心な読者をもったが、やがて十代の若者をひきつけ、図書館では『リトル・トリー』がいつも本棚から姿を消した。ニューメキシコ大学出版部が復刊すると六十万部を突破し、第一回全米書店業協会ABBY賞を受賞したという。引きつけられるのは、問題をかかえる人や若者にかぎるまい。とにかく、話がおもしろく、訳文は平明、藤川英之氏の挿絵が物語にぴったりで、七十を越えたわたしが読み返して飽かないのだから。

エピソードの幾つかを紹介したくもあるが、読者がこの本のなかではじめて出会うであろう感興を、先取りすることは、遠慮すべきだろう。

著者カーターは、一九二五年、テネシー州のアパラチア山脈地帯南西端に生まれ、五歳から十歳までは、本書に描くように祖父母と暮らし、その後の経歴は、よくわからないらしい。

訳者、和田氏の名は「たかお」とよみ、一九四〇年、神戸に生まれ、早稲田大学仏文科中退、東京外国語大学フランス語科卒業。書籍編集者を経て、翻訳と画業に転じ、翻訳では本書が最初の作業だという。フォレスト・カーターの他の作品も、この人の手で翻訳されるとうれしいが。

歌人・大塚五朗（三一）

1991-12-6　原田憲雄

『随筆　京都風土記』

一九四二年（つづき）　五朗、四十五歳。

『水甕』昭和十七年十月号。

相国寺参禅

物言はぬこの親しさや生徒（こ）と二人庭の日暮れの小竹（ささ）に対（むか）ひぬ（庭七二・続風土二三）

放参の暫時（しばし）を庭の苔ふみておのれと物を言へば寂しき　（〃〃・花野）

暁の疊の冷えも親しくて粥座につくとわがつつましき　（〃〃）

真昼間と物の閑けさ日の面にただひえびえと石一つある　（〃〃）

かく坐して思へば杳（とほ）し屋根よ来て小竹（ささ）吹く風は小竹の音をたつ　（〃七二・花野）

夕光のまだある屋根に目をやりて晴時放参の心親しき　（〃〃）

『水甕』十一月号。

参禅拾遺

真夏日の鴉があまた鳴く聞けば森かげ深く夕べもよひぬ　（庭七二・続風土二三）

夕光と今はさびしき庭土に大き影ひきてよぎる鳥あり　（〃〃・〃　五四・一二三・花野）

二夜ねて今はまからむ大寺の風先白き中に汗ふく　（〃　二）

山門を出づれば涼し放生の池の蓮の白く散りつつ　（〃〃・〃　一三・花野）

涼しみてわが立寄りしばらくも散る花がありて蓮の真白さ　（〃　一三）

日面にしらじらと石一つありて夏もやうやく静かなる庭

樹には樹の石には石の影あるを識（み）し時止静（しじょう）の心ゆらぎぬ（続風土二三・水甕なし）

以後『水甕』昭和十八年七月号までの切り抜きがない。

一九四二年十月二十五日に随筆集『京都風土記』が刊行される。その事情について大塚五朗「風土記上梓前後」が『艸』第十三輯（京都風土記批評号・昭和十八年三月）に載っているので、節略して次に。

「先生の随筆を兎も角纒めておかれてはどうですか。清書は私がしませう。」と原田憲雄君がいつてくれたのは、もう三年も前のことではなかつたかと思ふ。纒めてみたところで別段どうするといふあてもなかつたが、折角の原田君の好意を無にするのもどうかと思つて、あちらこちらに散らばつてゐたものを集めて渡した。それが約三百枚ばかりの原稿となつて、久しく私の原稿箱に埋もれてゐた。

一昨年、即ち昭和十六年の秋の頃と思ふが、私の所に来た原田君が、「先生歌集を出されませんか。何でしたら話をしてみる所がありますが……。」といふ話である。私は第二歌集を出したい望みは十分に持つてゐたのであるが、それにはまだ機が熟してゐなかつた。そこで、「歌集もさることながら、いつか君が清書してくれた随

筆を一度世に出したいものだが……。」と冗談のようにいつてみた。「それぢや一度聞き当つてみませう。実は身延にゐた時知合になつた兼子さんの親類に当るのが、東京の興文社の石川さんで、兼子さんを通じて話をしてゐるわけです。」といふ。私は私のように無名に近いものの、しかも売れるか売れないかわかりもしない随筆をさう手易くは引き受けてくれまいと思つた。

其後話が長びいてゐるうちに、原田君が愈々入営することになり、万事兼子さんに話しておいたから、といふ事で、その交渉は私対兼子さんにうつつたわけである。それで取急ぎ原稿を整理して、私の畏友岩見護氏にも見て貰ひ、兼子さんの手許まで送つた。その時心配したのは、兼子さんが義理だてをして、無理をされては困るといふことであつた。私としては出せるものなら出して貰つてもよいが、それ程自信のあるものではなし、随筆は何といつても余技（歌を本技とすれば）であるから、熟のこめ方も多少は薄かつた点もあつたのである。案の定兼子さんは病気中であるに不拘、随分あれやこれやと気を揉んで居られたらしいが、時局が時局であつたために、興文社の方でも難色があつて、遂に不調になつた。その時の兼子さんの私に対する気の毒がりやうは、涙の出る程のものであつた。むしろ本人の私が案外何とも思つてゐなかつたのに引比べて申訳ない位のものであつた。

そんな工合で、再び筐底深く埋れるべき運命にあつた所が、機縁といふものはどこにひそんでゐるものかわからない。或用件で私の所に来られた津田賢一郎氏に何かの話のはずみでこの話をしたところが、「私に心当りもあるから一度聞いてみませう。」といふことになつた。丁度一週間ばかりして原稿が戻つて来たのでそれを津田氏に渡して二三日したら、「引受ける所が出来ました。明日の午後一時にその本屋のあるじがお逢ひしたいとい

つてゐます。御一緒しませう。」といふたよりである。私は何だかうそのやうにしか思へなかつた。しかし兎も角も成行にまかせようと思つて、朝日ビルで落合つた津田氏と二人で本屋に出かけた。

そこは河原町四条上つたところの教育図書株式会社の楼上である。専務の田村敬男氏・企劃部長の真下信一氏・津田賢一郎氏、それに私の四人で卓を囲んでの会談である。後から聞いた事なのだが、津田氏が私の話を聞くや否や同じ所に勤めてゐる井上雅夫氏に話し、井上氏は大学同期の真下氏にその旨を通じ、真下氏が田村氏に上梓をすすめられた、といつた頗る複雑な経過をとつてゐたのである。僅かの日数の間に、それだけの手が煩らはされてゐたので、それにつけても私一人の随筆上梓のために、これだけの方々が心を運んで頂けたかと思ふと、実際何と感謝していいかわからない。しかも「あなたの京都観と私のそれとじつに共鳴するところが多かつたので引き受ける決心をしました。甚だ失礼ですがまあ私の侠気がさうさせたので、あなたを一つ売り出してみたくなつたんですよ。」といふ田村氏の言葉を聞くに及んでますますその感を深くしたのである。更に聞けば田村敬男氏も信州人だといふ。この奇縁には二人とも手を拍いて驚いたわけである。・・・・

装幀についてはかねがね力になつてやると、いつてゐて下さつた山口華楊さんにまづ相談しなければならぬ。私は取るものも取りあへず氏の紅梅町の御宅を訪問した。ところが、「それは何よりでしたね。実は過日、金島〈桂華〉さんに一寸さうしたお話をしておきましたところ、大変乗気で、小野竹喬氏にも話しておかうといふ事でした。どうですこれからひとつ金島さんの所へ行つてみようぢやありませんか。」といふお話である。山口さんも、金島さんも、小野さんも、ただ単にお子さん達を三中で教へたといふ関係しかないのである。それにこん

なにまでして下さる御好意は勿体ない。そこで装幀及挿画の方はお三人に御一任することにした。

さて書名だがこれにはほとほと困らされた。…自分が気に入つた名は、出版社に難色があり、出版社が申し出る名は私の気に入らない。結局五つ六つの中から第三者の意見も聞いた結果「京都風土記」と決定したのである。結果から言へばこれが本を売らしめたらしいが、今とてもこの名は垢抜けのしないものだと思つている。

其後本屋との間にいろいろな交渉が重ねられて、兎も角も表紙は木版、挿絵はオフセット、紙質はミドリオ、大体三百頁前後、活字は古風に五号、定価は二百円前後、といふことに決つたのが九月の中旬頃であつたと思う。

…田村氏から「吉井勇先生から序文を貰ひませう…」といふ話が出た。これはわたしにとつてまたとない有難い話である。といふのは、いろいろの事で三回四回と吉井先生にお逢いする機会があり、その度毎に先生の深い人間的温かさに私は殆ど生まれて初めてといつていい位の傾倒を先生に感じてゐたのである。…ところが先生は…盲腸の手術で…帝大病院に入院されることになつた。その前日、北白川のお宅をお訪ねしたところ、先生は他出中で、奥様からその話をうかがひ、さては序文の話も実現出来なくなるのではあるまいかと、あの農大横の道を通りながら心細い思ひであつた。…

さうした或日…山口さんがわざわざ表紙と箱の絵を持つて来て下さつた。…絵を拝見した途端、遂こゐをあげた位嬉しかつた。…早速翌日本屋に届けて、「…山口さんの名にかかはることだから、表紙だけは十分気をつけてて下さいよ。」とひたすら頼んだ。その時田村氏は「吉井先生は病床で是非序文をかくと言つて居られます。…」と朗報を伝えてくれた。…

山口さんから挿絵が届けられた。…金島・小野両先生は…文展出品を控えて、十月の八日か九日でなければ書けないといふ話、実際各方面に御迷惑をかける事の夥しさに私はひとり汗かく思ひであつた。十月九日…小野先生の御宅を御訪ねしたところ、既に絵が出きてゐて奥様からそれを頂いた。…その夜の八時頃、どしゃぶりの中を、「金島さんの絵が届けられましたから」と山口さんのうちの昌哉君が持ってきてくれた。…

十月廿日発行の予定がのびて、それでも見本刷が出来たのが廿二日頃ではなかつたかと思ふ。…表紙の木版の不手際さやオフセット版の貧弱さや、不満はあるにはあつたが、しかしかかる時勢にかかる本が出来たといふ事は、私の一生にとつて決して忘れることの出来ないよろこびであつた。ただ心配だつたのは本の売行きである。私はともかくも、義侠的に出してくれた田村氏に対して売れないでは申訳ないと思ふのである。ところが幸に十一月の廿日に再版するの運びになり、更に一月廿日には三版上梓の企劃を出してゐる。これで安心である。…

原田が先生から頂いた本はある事情で失われ、手許のは初版ながら箱がなく背もとれている。扉は先生の手で「大塚五朗／随筆　京都風土記／教育図書株式会社」とあり、奥付の主要項目のうち先の記事と重複しないものをあげると「昭和十七年十月十五日印刷／昭和十七年十月二十五日発行／三〇〇〇部／定価金弐円参拾銭／印刷者・京都市下京区岩上通五条上ル一誠堂印刷所・伊藤一郎／出文協承認ア２４０１１４」である。B6。序文、三頁。目次、三頁。中扉。本文、二三〇頁。紙質も製本も粗末ではあるが、装幀、挿絵、序文ともに友情に溢れ、戦争中によくこれだけのものが出せた、といま振り返ってみて、感嘆する。数ケ月の間に版を三度かさねたことも。

「冬の旅」を聞く

1991 12 15　原田　慶

新田英開（にった・ひであき）バリトンリサイタルを聞きに行った。曲目はシューベルトの歌曲集「冬の旅」全曲である。伴奏は杉本千代子先生、娘がピアノを教えていただいた方で、いまもずっと、子ども達に音楽の心を教え続けておられる。会場のバロックザール（青山音楽記念館）は、西京区上桂にあり、初めて行ったのだが、小ぢんまりした親しみを感じる建物で、気軽に何度でも行きたいような雰囲気を持っていた。夜に家を空けて出かけたのは初めてだから、なんとなく気がかりだったが、そのうちに忘れて楽しくなってきた。ホールはそれほど広くはないが、満席だった。

午後七時、舞台に二人が登場される。ぽつんと置かれていたグランドピアノの前に、黒の上下の新田氏、この方はオペラで活躍されているというので、どこかで拝見したお顔のように思うけれど、はっきりとは思い出せない。緑色の大きく背の開いたドレスの千代子先生は今夜は一段と輝いて見えた。椅子に腰をおろして、眼鏡をかけられるとその縁がキラキラ光った。ピアノの音が静かに響いて、わたし達の気持が自然にすうっと音楽の中へ入ってゆく。力強いバリトンが、室内の空気にゆっくりと不思議な景色を描き出す。第一曲は「おやすみ」。

よそ者としてやってきた私は
ふたたびよそ者として町を後にした

五月はいくつもの花束によって
私にやさしくこたえてくれた
娘は愛を語り
母は結婚をさえも語ってくれた
しかし今この世はたいそう暗く
道は雪にとざされてしまった

…あんなにやさしかった町の人々も、今は心を閉ざし、よそ者は居る所を失って、また旅に出なければならない。月の光がしるす影法師を道づれとして、私は白い曠野の上に、けものの足跡をたどって行こう。

ドイツ語でうたわれる詩の心が、日本語に訳された詩を見ているわたし達に、そのまま伝わってくる。ピアノの伴奏がこれほど美しいと思ったことは、今までになかった。歌曲は自分でも歌うものと思っていたから、伴奏の音を気をつけて聞いていなかったのかも知れない。その伴奏のピアノに、特に心をひかれた。心をこめて大切に弾いておられるのを見ると、聞いている方も同じ気持になる。

歌は続く。救われがたい失意の放浪者は、楽しかった春を思い、恋人の去った悲しみと絶望感に、狂い出しそうな心をおさえて、冬の裏道を逃げるように歩き続ける。時には涙を流して立ち止まり、また、氷の張りつめた川の底に、ほとばしる流れを自分の心のようだと思い、楽しかった恋の季節を夢見るが、覚めて現実に引きもど

されると、そこには雪に閉ざされた冬景色が広がっているばかり。疲れも寒さも感じないほどに傷つき、打ちひしがれた人の心が、ひとこまひとこま現れては消えてゆく。歌声はその心によって強くなり静かになり、やさしくなりまた暗くなる。ピアノはその心の波を打つように、また離れて風景を描写するように表現される。ピアノと歌声が、表になり底に沈み、一本の綱になって続く。

十六番の「いや果ての望み」は、一枚の色づいた葉に自分の希望をかける。調子の強い歌で、たいへん劇的なうたいかたがされる。

ああ木の葉が地に落ちると
それといっしょに希望も落ちる
私自身も大地に身を投げて
私の希望の墓の上で泣くのだ

この詩のテーマは、小学校の国語の教科書にも出てくる〇・ヘンリーの小説「最後の一葉」をも思い出させた。「冬の旅」は、シューベルトがヴィルヘルム・ミュラーの詩をひとつも省略せず、順序を少し変更しただけで、二十四篇全部に作曲したものである。全体の詩の暗さには驚くが、ミュラーの詩の深い悲哀と絶望感に加えて、シューベルトのその詩に与えた音楽は、さらにそれをうわまわって陰鬱であるといわれる。わたしの学校時代の

教科書には、五番の「菩提樹」と六番の「あふるる涙」だけが出ていた。

詩集『冬の旅』が出版されたのは一八二四年で、シューベルトが作曲したのは一八二七年。前半が二月に、後半は十月に作曲された。そしてこの年の九月三十日に、ミュラーは三十三歳で亡くなっているから、「冬の旅」の全曲が歌われるのを聞いていない。しかし、これより四年前に、シューベルトはミュラーの「美しき水車小屋の娘」を作曲している。ミュラーの詩は、シューベルトの個性的天分に音楽のひらめきのすべてを表現させる触媒のような力を持っていたのだといわれている。

伝記によると、シューベルトは会話がへたで、自分の考えていることを相手によく分らせることができなかったという。家の中では愛想がよいのに、見知らぬ人に対しては臆病のあまり、敬意を失する言動があった。特に女性に対しては小心だったそうである。だから自分の思いを代って言ってくれると感じる詩句に曲をつけているうちに、六百を越える美しい曲が、いつのまにか出来上がっていたのだろう。ゲーテの詩にも作曲して、それを贈ったが、ゲーテの方では関心を示さず、何の返事もなかった。しかし、わたし達はシューベルトやヴェルナーの曲のおかげで、子どものころからゲーテの「野ばら」を歌っている。

シューベルトの楽譜に対して印刷屋の支払う代金は顕微鏡的金額であったといわれ、シューベルトは大変に貧しかった。何時もベートーヴェンを遠くから崇拝しているばかりだったが、「冬の旅」の前半が作曲された頃、ベートーヴェンの病気がずいぶん悪くなっていた。医師の治療によってベートーヴェンが一時、小康を得たことがあり、親友であり、秘書役でもあったシントラーという人が、シューベルトの歌曲を六十曲ほどベートーヴェ

ンに見せた。シューベルトの曲をあまり知らなかったベートーヴェンは、「普通の詩の十倍も長いこのような詩を作曲する時間をどうして見つけることが出来るのであろうか」と驚き、このほかにも、少なくとも五百曲はあると聞いて、「実にシューベルトはその中に霊火を抱いているに違いない」と言ったそうである。ベートーヴェンは数日の間、その歌曲に熱中していた。他の歌劇やピアノ曲も見たいものだと言ったが、また病気が悪くなって、シューベルトの音楽のすべてを見ることはできなかった。もっと早くシューベルトの真価を認めなかったことを後悔し、「かれは世界をはなはだしく動揺させるだろう」と予言したという。

これを聞いたシューベルトは喜んで、死に近づきつつあるベートーヴェンを二度も見舞ったが、二度目には、ベートーヴェンはもう話すこともできず、手で合図をしたが、誰にも理解することはできなかった。一八二七年三月二十六日、五十六歳のベートーヴェンはこの世を去った。シューベルトは葬列の松明持ちをしたという。

ベートーヴェンの亡くなった年の十月に、シューベルトは「冬の旅」の後半を作曲したが、貧乏なことに変りはなかった。翌年の八月頃には、持病の、頭がふらふらしたり、充血したりすることが度々おこるようになり、田舎に近いところに転居して、すこし元気を取り戻したように見えた。しかし十月には、食べ物があまり食べられなくなり、十一月には、まったく食事がとれず、だんだん衰弱していった。十四日頃から床につきっきりになり、ベッドの上で、「冬の旅」の後半の校正をしていたが、この時にはすでに、この歌曲のように、暗く寂しい気持で再び帰ることのない道を急いでいたのである。そしてこれが彼の最後の仕事になった。十七日には、頭が混乱してきた。十八日に、兄のフェルディナントを呼んで「お願いですから自分の部屋に連れていってください。

こんな地面の下の隅っこに捨てておかないでください」と言った。兄は悲しんで「おまえはいつもの部屋で、自分のベッドに寝ているのだよ」となだめると、瀕死の病人は「いやそれは嘘だ。ベートーヴェンがここに居ないではないですか」と言った。それほどベートーヴェンは、シューベルトの心をとらえていたのであろう。一八二八年十一月十九日、満三十一歳九か月のシューベルトは、短い生涯を終えた。

「おやすみ」に始まり、風見の旗・凍ゆる涙・かじかみ・菩提樹・あふるる涙・川に在りて・顧みて・鬼火・憩い・春の夢・孤独・郵便馬車・霜おく髪・からす・いや果ての望み・村にて・嵐の朝・まぼろし・道しるべ・はたごや・勇気・幻の陽・辻音楽師の二十四曲が一気に歌われて、新田英開氏の独唱による「冬の旅」が終った。

何か不思議な夢から覚めたような気がした。拍手によって何度も舞台に呼び戻された二人の方は、花束を受け取られていたが、これほどの大曲を歌いおわったとは思えないように、初めて出てこられたときと同じ様子に見えた。

外へ出ると十一月も終りの夜は、ずいぶん寒く感じられた。静かな町を駅まで歩くと、電車は変わらぬ明るさでやって来て、私たちをほっとさせた。

杉本千代子先生は、混声合唱団の伴奏をずっとしてこられ、四年くらい前の夏、京都市民混声合唱団のピアニストとして、中国への演奏旅行にも参加された。わたしはそれらの合唱団の発表会も何度か聞き、それぞれに美しい歌とピアノに感動した。しかし「冬の旅」のピアノにはもっと何か、言葉には表わせない大きな力が感じられた。いま、京都は大きく様変わりしようとして、色々な問題をかかえている。その京都の町のなかにある旧

家、杉本家をご主人の秀太郎氏とともに、祖先からの文化遺産として守るために、千代子夫人も身命をかけて努力されたことをわたしたちは知っている。市の文化財として指定されるまでには、まったく思いがけないほどの難事が起こったようだった。これから先も決してた易い道ではない。その思いが言葉を越えた力となって、地に足を踏みしめるような確かさが音に込められたのではないだろうか。この夜は眠れないままに、いろいろ考えた。そして少しでもよい仕事をしようと努力することが、そのまま人々へのやさしさであり、あらゆるもの達への愛なのだということに気がついた。答えはあたりまえのようなことでも、それを自分が確かにわかるには、出会う機会があるものなのだと思って、わたしはほんとうに嬉しかった。

桃花源記と廬山遊記（中国の詩人と仏教　一八）

1981 二 10　原田憲雄

陶淵明の「桃花源の記」は、有名なものですが、たれもが手許に備えているわけでもないでしょうから、話を進める都合上、まず拙訳を掲げておきましょう。詩の方は、ほとんど記の繰返しですから省略して、必要な時には、その部分だけ引くことにします。

晋の太元年間、武陵に漁を仕事とする人がいた。渓川ぞいに、どれほど行ったか忘れたが、ふと気づくと桃花の林だった。両岸数百歩、ほかの木はなく、香ぐわしい花々が鮮やかに美しく、はなびらがひらひら舞い落ちる。漁師はたいへん不思議に思い、さらに進んで林の奥を見きわめようとした。林は水源で尽き、そこ

は山だった。山には小さな洞穴があり、ぼおっと光がさしているようだ。で、船を乗り捨て、洞穴から入ってみた。初めはとても狭く、やっと人が通れるくらい。また数十歩進むと、からりとひらけた。土地はひろびろとし、家並みはととのっている。よい田畑、美しい池を、桑や竹のたぐいがふちどり、道が縦横に通じ、鶏や犬の声が聞こえてくる。そのなかを行き来したり、田作りしている男女の服装はすべて外部の人みたいだが、年寄りも子どももみなにこにこと楽しそうである。漁師を見るとたいへん驚き、どこから来たかとたずねる。くわしく答えると、家に連れて帰り、酒の用意をし、鶏を締めてさかなとした。村ぢゅうがこの男の来たことを聞き、みんなでやってきてあれこれ問いかわし、自分のほうのことを「うちの先祖は、秦の時代に戦乱を避け、妻子や村人を引き連れ、この辺鄙なところへやってきて、出ることもなく、外部の人とは関わりがなくなったのです」といい「いまは何という時代ですか」と聞く。漢代さえ知らないのだから、魏や晋はいうまでもない。漁師は、一々くわしく、聞いた話をしてやると、みんなは嘆息するのだった。ほかの連中もそれぞれにまた家に招いて酒食を出した。数日滞在して別れたが、そこの人は「外界の方々には話すまでもないことです」と言った。洞穴から出ると、舟がそのままあった。前の路を通り、所々印をつけておいた。郡に帰りつくと、太守の役所にゆき、ありのままを報告した。太守はすぐ人をやり、漁師に従ってさきの印の所を捜させたが、迷って、もはや路は見つからなかった。南陽郡の劉子驥は高い志をもつ人で、この話を聞き、喜んで、行こうとしたが、果たさぬうちに病気で死んだ。その後はもう、訪ねようとする人はなかった。

さて、はじめに「太元年間」とありますから、この記の書かれたのは太元より後ということになりましょう。太元は三七六年から三九六年までですが、このあたりの略年譜を掲げると次のようになりましょう。

三七六（太元　一）　慧遠四三歳　陶淵明一二歳
三八四（〃　九）　〃　五一歳　廬山に入る　〃　二〇歳
三八五（〃　一〇）　〃　五二歳　姚萇、前秦皇帝符堅を殺す　〃　二一歳
謝霊運生れる
三八六（〃　一一）　〃　五三歳　廬山に「神仙」現れる　〃　二二歳　結婚？
姚萇、後秦皇帝となる
三九三（〃　一八）　〃　六〇歳　姚萇死去　〃　二九歳　江州祭酒となりすぐ辞任
三九四（〃　一九）　〃　六一歳　後秦姚興即位。前秦滅亡　〃　三〇歳　妻と死別
三九七（隆安　一）　〃　六四歳「廬山記」はこの前後？　〃　三三歳
三九九（〃　三）　〃　六六歳「廬山東林雑詩」はこの前後？　〃　三五歳　江州刺史桓玄に仕える
四〇〇（〃　四）　〃　六七歳　廬山諸道人「遊石門詩」　〃　三六歳　建康に使して帰る
四〇一（〃　五）　〃　六八歳　鳩摩羅什、長安に来る　〃　三七歳　母の喪に服す
四〇三（元興　二）　〃　七〇歳　白蓮社を建てる　〃　三九歳　服喪　桓玄革命　安帝幽閉
四〇四（〃　三）　〃　七一歳「形尽神不滅論」　〃　四〇歳　鎮軍将軍劉裕の参軍となる

四〇五（義熙　一）　〃　七二歳　　〃　四一歳「帰去来の辞」
四〇七（〃　三）　〃　七四歳「遊山記」　　〃　四三歳
四一一（〃　七）　〃　七八歳　二七歳の謝霊運に会う　　〃　四七歳
四一三（〃　九）　八〇歳「万仏影銘」謝霊運「仏影銘」　〃　四九歳「形影神」
四一六（〃　一二）　〃　八三歳　死去（一説四一七年）　　〃　五二歳
四二〇　晋朝滅び、劉裕、宋の国を建てる　　〃　五六歳
四二七（元嘉　四）　謝霊運、四三歳　　〃　六三歳　死去

もとにもどって、「桃花源の記」が三九七年以後の、そうしてそれに近い頃の作だとすると、慧遠が「廬山記」や「廬山東林雑詩」を、廬山諸道人が「遊石門詩」を作った時期に当ります。晋の滅びる四二〇年前後に当てる説もありますが、それも慧遠の「遊山記」の後です。陶淵明の「形影神」が慧遠の「形尽神不滅論」の後の、そして「万仏影銘」と同じ年に作られていることから推しても、「桃花源の記」と慧遠の廬山諸記との間に関わりがあろうと察せられるではありませんか。

次に、「桃花源の記」と慧遠の廬山諸記との、共通点と差異とを、調べてみたら、何かが見えてこないでしょうか。まず、共通点。

「桃花源の記」は「太元年間」のことを記しているのですが、「廬山記」もそのなかでの特異な事件「沙弥の衣をつけた人」（すなわち湛方生の「廬山の神仙」）の出現は、慧遠はあらわに書いてはいないが、太元十一年

のことでした。「太元」は現実に晋代の年号ですが、神話時代に初めて作られた暦の名で、いわば人間的時間の最初というほどの意であり、「太玄」と通じて虚無恬淡といった心を含み、中国人にとっては神秘を感じさせる言葉なのです。だから「桃花源の記」のような、あるいは「廬山記」の沙弥の、不思議な物語の「時間」としてはぴったりです。そうしてその太元は現実の時代としては、北方では異民族の国が次々に興亡し、ことに「秦」と自称する一つの国が滅び、滅ぼした国がまた「秦」と自称します。南方では、晋という漢人の朝廷があり、天子はいても、名ばかりで、軍閥が権力の争奪に明け暮れている「末世的」なあるいは「世紀末的」な混乱・退廃の時代なのです。平和を愛する人々は、みなそんな現実の日常から去って、どこか理想的な「空間」にゆきたいと願っていました。

陶淵明の描く桃花源も、慧遠の描く廬山も、権力の争奪とは関わりのない、理想的な「空間」であるという点で共通し、そこへ行くには「偶然」あるいは非常な「精進」によらなければならないにしても、日常世界とは地続きであるところは同じです。

数え上げると、なるほどとうなずかれる著しい共通点がありながら、これまで人々がこの二つを対比しようとしなかったのは、読んで受け取る二つの世界が、ほとんどまったく違うように感じられたからでしょう。とすると、二つの世界は、共通点においてよりは、違い目において特色があるのかもしれません。次回は陶淵明の「桃花源の記」と慧遠の廬山諸記との差異を検討することにしましょう。

※本号の発行をもって、わたしたち方向社同人の、年末年始のご挨拶に代えさせていただきます。 1981 12 25